

いぼおとし地ぞう（和田町）

和田は三床山のふもとにあり、大むかしから人が住んでいました。

その出村の岩立は、西田中、武生をむすぶ街道でした。その道のかたわらに、むかし地しんで落ちた大きな岩があり、その上には、いぼおとしで名高いお地ぞう様が祭られています。

むかしむかし、となり村の西大井におきみさんという、目のぼつちりしたかわいい女の子がいました。

ある日のこと、このおきみさんの手につと小さいいぼができればじめ、しばらくの間みにくいいぼだらけの手になってしまいました。

村の子たちはいやがって、だれも遊んでくれま

せん。

「おつ母はん、なんでぼう（わたし）の手だけ、こんなぶつぶつができるんにやる。みんなうつつる、あっち行け」って石をぶつつけるんにや。」

と泣きながら帰ってくるしまつです。



おつ母さんは困って、村一番の物知りと言われる茂作じいさんのところへ行ききました。

「いぼができたんけの、かわいそうに。まだ手だけでよかつたのう、からだじゅうでできる子もいるでの。山づたいに岩立へ行くと、いぼおとしのあらたかなお地ぞう様がござらっしゃるで。近くのなんでも屋のおじじをたずねていつてもなはれせん。」

と親切に教えてくれました。

さっそく、おつ母はんがたずねて行くと、なんでも屋のおじじが、

「よう来なはつたのう。このいぼとりの水はの、いぼにつければいいんにやけど、人に見られたら、効き目がないと言われてるんで。」
と教えてくれたので、次の日は、おきみさんを連れて行きました。

なんでも屋のおじじは、おきみさんをすぐ近くの急な石段を下まで案内し、川の中の音を指さし

て、

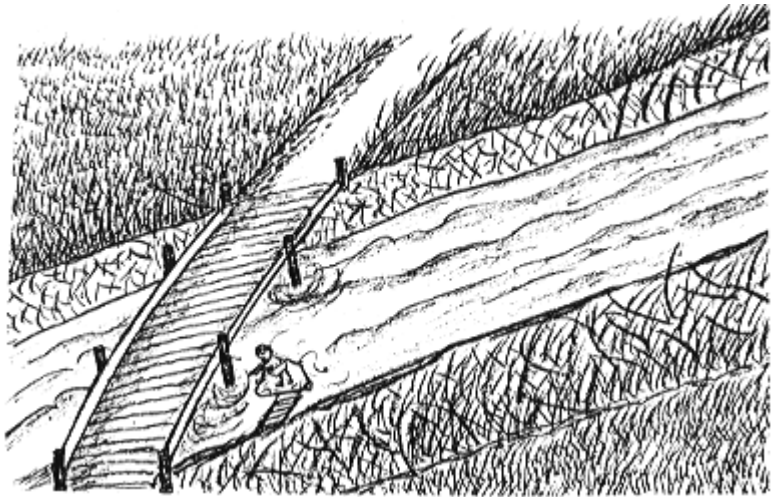
「あの岩のまわりの水を、ていねいにつけなはいの。」
と言つて、さっさと石段を上つて行つてしまいました。

ひとり残されたおきみさんは、立っている岩はすべるし、川の水はごうごうと音を立てて流れるし、とても恐ろしくなつてしまいました。

でも、今この水をつけなければ、またみんなからいじめられ、仲間はずしにされてしまうと悪いなあおして、もう一度あたりを見まわし、人が見えないのをたしかめて、一気に水をつけました。

ああ、もうこれでいぼが取れるのだと思うとうれしくなつて、ひよいと石段にとびうつるとき、ドボンと川の中に落ちてしまいました。

しかし、人に見られたら効き目がないと聞いているので、一生けんめいに川からはいあがり、石段をかけ上つて、店で待っているおつ母はんのところにまどりました。



話を聞いたおつ母はんは、

「この子は、よっぽどいぼを取ってほしかったん
にや。かわいそうに。」

と頭をなでながら、ほうびに好きなせんべいを買
い、お地ぞう様に、

「どうか、おきみのいぼをとっておくんはない。
とお願いをして、帰りました。」

しかし、おきみさんのいぼはなかなかおあらず
足や口の中までできてきました。いつまでも仲間
はずしにされるのはいやなので、今度は勇気をだ
してひとりで行くことにしました。

だれも見えないのをたしかめると、さっさと
手足や口の中に水をつけ、お地ぞう様に、

「どうぞ、いぼが取れますように。」
とお願いで帰りました。

何回か通っているうちに、ふしぎやふしぎあの
いぼが、手も足も、口の中までも、すっかりなく
なっていました。

おきみさんの喜びは、一かたではありません。
今度は家中そろって、お地ぞう様にお礼まいりを
しました。

このような話が、人から人へと口伝えにひろが
り、府中（武生）天津、糸生（丹生郡）の方から
も沢山の人がいばおとしに来たということです。

今は、川の改修や道路の整備で様子がすっかり
変わってしまいました。岩の上には立派なお堂
が建てられて、お地ぞう様はその中に祭られてい
ます。

毎年、七月二十四日には地ぞう祭りが行われて
います。